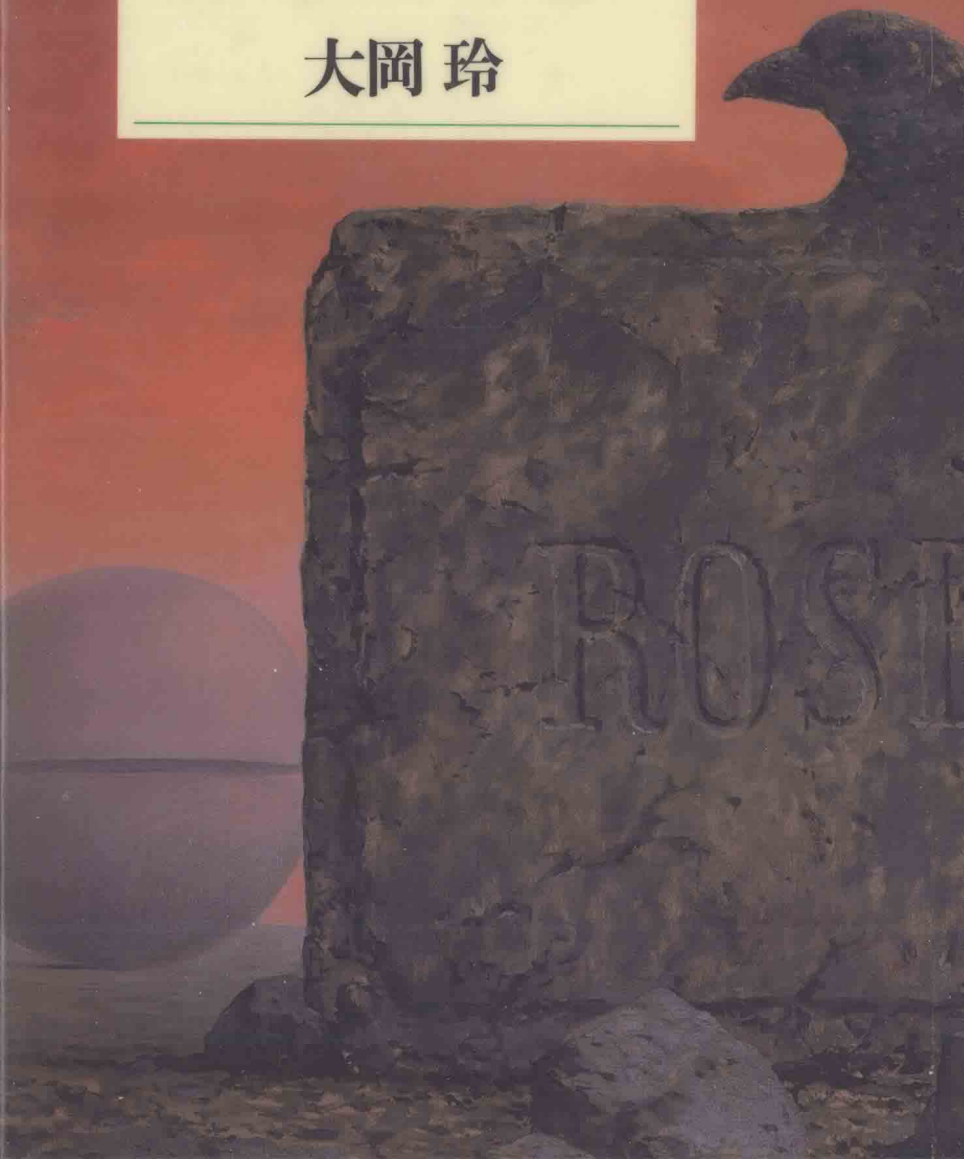


黄昏の  
ストーム・シーディング

大岡 玲



黄昏の  
ストーム・シーディング

大岡 玲

On man heavens influence workes not fo,  
But that it firft imprints the ayre,  
Soe foule into the foule may flow,  
Though it to body firft repaire.

ISBN4-16-311140-9 C0093  
© Akira Ôoka 1989, Printed in Japan

黄昏たそがれのストーム・シーディング

一九八九年七月十五日 第一刷

(定価はカバーに  
表示してあります)

著者 大岡 玲

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三十一三  
電話代表(〇三三)二六五一一二二一

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は  
お取替致します

目次

緑なす眠りの丘を 5

黄昏のストーム・シーディング 105

あとがき 220

装画 ルネ・マグリット

「青春の泉」

René MAGRITTE

“LA FONTAINE DE JOUVENCE”

©ADAGP Paris, 1989

横浜美術館

装訂 坂田政則

作品集  
黄昏のストーム・シーディング

R  
に

緑なす眠りの丘を



初出「文學界」昭和六十二年十二月号

# I

その頃は、いつも睡かった。睡気が最初に兆したのがいつなのか、はっきりした記憶はない。十五歳の時には、既にそうだった。一九七五年。東南アジアの南北に細長い国で激しく、しかものろのろと進行していた戦争が終った年だった。

はじめ、睡気はぼくにとても優しかった。午後の光の中で毛布にくるまり、うつらうつらと白昼夢を紡ぐことが快樂だ、ということだけを教えてくれたからだ。学校の勉強になかなかついていけなかったり、異性に対する誘引能力に疑いを抱いたり、生きることが呼吸をしていけば良いだけのものではないのだと痛切に感じたりする幼い者特有の病いに効果があった。ストラヴィンスキーの「春の祭典」を聞きながら、自分がいつの日か世界の救済者になるのだ、な

どという荒唐無稽な妄想を毛布の中で噛みしめる十五歳のぼくが感じていたわくわくする気持ち良さは、きつと現実忌避の一言で片づけることができるのだろう。

だが当時は、ぼくはそうした考え、つまり原因があつて睡くなるということにあまり興味が持てなかつた。因果関係で説明できることがたくさんあるのを知らないわけではなかつたのだが。

もちろん睡くなることへの恥かしさはあつた。ただ、睡気とその快楽とはいつでもすぐに手が切れると思つていたから、ぼくは気にしなかつた。そうでないことがわかつたのは十八歳の時で、もう矯正の方法などまるで思いつきもしなくなつていた。あせりは確実に増えていった。

人間にはもはや睡眠は必要ない、と声明する科学者たちがいるという話を聞いたことがある。巨大な敵たちがうろつき回る夜の間、身を守るために動かずにした哺乳類の行動が眠りの根源であり、文明的手段によつて安全を確保できるようになつた人間には単なる休息だけで充分だ、というのがその学説らしかつた。

ぼくはかつてその説を知らなかつた。もし耳にしていたなら複雑な気持ちになつたことだろう。眠りを好んだぼくは同時に、それによつて失われる外部世界の時間と経験を惜しんでもいたからだ。外の世界の単位で一時間睡くなることは、その間ただ意識を別の方向に振り向けていたということにはならない。睡さの厚い膜を通過すると一時間はまったく別の何かに変換さ

れ、隔離された小宇宙を作るのに貢献する。劣等感はそのから生まれるのだった。これはニセの宇宙、ニセの時間、ニセの生命なのだ、という気持ち。ただ問題は、ぼくがニセモノとホンモノの区別をつけられないことであつた。しかも、もつと具合が悪いことに、ニセモノがいけないということをぼくは自分自身に納得させることができなかつたのだ。

しかし、『妹』の出現までは、それでも、睡気が徹底してぼくを痛めつけることはなかつた。万事はゆつたりと流れていた。そしてぼくが、二十二歳の誕生日をむかえる少し前に、『妹』が初めて視野に入ったのだった。

ごく穏かな秋のある日、大学でいくつかの講義を漫然と聞き、女友達とお茶を飲みながら話をしたあと家にもどつてくると、母親があたりに憤怒をまき散らしていた。すっかり暗くなり寒さが急激に増した夕刻の景色の中を歩いて、ぼくは黒い鉄製の門にたどりついた。そこを開け、コンクリートを打ち放しにした階段を登り切り、マホガニー色の玄関扉を開けた途端、金切り声に限りなく近い怒声が聞こえた。建築家の父がごく簡素に設計した吹き抜けの玄関ホールに、その音はよく響いた。常に理性的であることを誇りにし、声を荒げたり感情的になつたりするのを良しとしない母親の、思いもよらぬ大声に、ぼくは一瞬だけたじろいだ。それからそつと革靴を脱いで、螺旋状の鉄製階段をゆつくり上つた。

自分の部屋に入り明りをつけ、藤色のカーテンを開けて外を眺めた。緑の多い庭を持つ家屋が林立するこのあたりでは、窓から洩れる電気の光は散乱して霞のように空中を漂う。麥哲もないいつもの風景だった。母の声は、それが発射される対象である父のからだをつきぬけ、防音マットが沢山つまった一階の天井を貫き、ぼくの足元にとどいた。床が細かく震動し、足の裏がむずがゆくなった。

家族とか血縁といった関係を、なるべく柔らかく、なんでもないことのように扱いたい、と思ったのはいつ頃からだろうか。家族が仲良くやっつけていける、というのがかなりの幸運なのだとぼくは認識していた。ぼくは父と母の間に生まれた唯一の子供だということに長らくなっていたので、ぼく自身の感覚を別にすれば、甘やかされて育ったことになるだろう。だが一人っ子であることが、緊密で幸福な家族関係を保証する、などという方程式はどこにもない。だから、できる限り仲良くしていくために、ぼくは反抗的ではない態度をとり続けた。

人生で大事なことは、偉くなることだ、と母に言われたことがある。ぼくは彼女が大真面目なのを知っていたので、昔はやった歌をもじったりはしなかった。人生で大事なことは、タイミングにC調に無責任……。

金持ちや権力者になることを、母の言葉は意味していなかった。むしろ反対に、感受性の豊かさ、他人への思いやり、文化的芸術的人生への不断の接近、現実と理念の間に横たわる深い

溝を埋めようとする努力、といった抽象概念が「偉さ」だった。これらを実行した上で、世間にとって有益な人物として認知されることが大切なのだった。

明治維新後日本がはじめて手ひどく敗北した対外戦争のあと、日本人はいわゆる勤勉さと共に復興した。その歴史で、経済に対する熱意よりは少ないながらも執拗に続いてきた文化国家への願いが、彼女の言葉にはあるのだ、と思えた。フランス文学を短期大学の女生徒に教える行為を通して、彼女は理念を実践してきたのだった。

もつとも、ぼく自身は母親の要求には答えられないだろうと感じていた。感情的トラブルを避けるためだけに、ぼくは「偉くなる」ことへの申し訳程度の野心を誇張した。より大きなトラブルに結びつくやり方かも知れない、とあやぶみながら。

怒声は、夕飯の仕度が終わったという情報になって、ぼくにも向けられた。今までほとんど波風の立たなかった家庭に現われた新しい状況に、ぼくは好奇心を持った。しかし、その好奇心はすでに疲労しているようでもあった。

母の声を二度聞くことにならないうちに、ぼくは静かに階下におりた。廊下を東に三メートルほど歩いて、格子状の木枠に曇りガラスをはめた扉を押し開けると、中華料理独得の匂いが鼻を打った。スペイン製の大きな丸テーブルには、直径三十五センチはあろうかという大皿が三つ並んでいた。それらに盛られた料理は、おそらく酢豚と麻婆豆腐、八宝菜らしかったが、

確実にそれらしい味がするわけではないようだった。母は怒ると必ず中華を作る。機嫌が良い時は料理を人まかせにすることもしばしばだが、怒ってしまうと、一人で、しかも決まって中華を乱暴に作った。

扉を後手に閉めたあと、ためらったまま佇んでいると、彼女は強い視線の圧力と尖らせた唇で、席に着くようにうながした。おまえにもよく聞かせておきたいことだから、と母は言い、これみよがしな怒りの顔つきで、斜め向かいに坐っている父に頸をしゃくった。

部屋中に湯気がたちこめていたが、温かい雰囲気は微塵もない。父の顔色は青粘土のようだった。そして口に入れた料理は、爆発物同然の味といってよかった。酢豚に入った人参は、油の量が足りないせいで焼けこげていたし、たまねぎはほとんど生だった。酢がきつく、口に到達する前に眼球で味わってしまう。八宝菜は、透명한軟体動物と色とりどりの内臓にしか見え、あちらこちらに片栗粉の塊があった。麻婆豆腐の色合いは、胸をどきどきさせるほどの暗さで、食べてみればコールドールでないことがわかったが、食欲は刺激されない。

生まれて初めて見る激怒の料理だった。いまにもつかみかからんばかりに、それらの食物は憤っていた。単なるまずさの問題などではありえなかった。

愛情への裏切り、築き上げてきた人生の崩壊、長年の労苦に対する徹底した無理解といった言葉が、ぼとぼとあった。それらは法律の条文のように固く、妥協の余地がないものだった。みごとに抽象的な正当性を含んだその告発が渦巻く部屋の壁からは、しかし、母の恐怖と悲惨が

滲み出ていた。そのことの方がむしろ、ぼくを耐え難い気分にした。彼女が糾弾する夫の裏切りが二十年前のことだ、とはとても信じられなかった。その場でいま進行している背信を母の視線ははつきり捉えている。そう思えた。

攻撃は続行された。何日も。ふいに父は都心にある事務所から帰らなくなった。母はその事実に対して二言三言呟きを洩らしただけで、事務所に出かけていくことはしなかった。たかだか二十キロほどの距離は、彼女にとっては無限に遠かったのかもしれない。

父が消えて十日後の夜、ぼくは太い肉の管が振動しているようにさえ思えるゾニー・ロリンズのサククスを聞きながら、ぼんやりしていた。片手に赤葡萄酒の入ったグラスを持ち、ロッキングチェアを微かにゆらしながら坐っていたのだ。外は静かで、窓を開けると晩秋の冷気が入ってくる。雲はなく、カシオペア座の星々が高みにくつきりと輝いているのが見えた。それを目じるしにして他の星座を探そうと思ひ椅子から立った瞬間、押し殺したロバのいななきに似た音声が響いた。

ぼくは急いで隣りにある母の書斎に行った。彼女は椅子に坐ったまま汗だくになっていた。机上にはフランス語の原書が開かれている。茶のカーディガンの上からもわかるほどブラウス



は濡れ、椅子の下にまで汗が滴り落ちていた。ぼくはうろたえながら、手に持ったグラスの酒を彼女に飲ませた。一点を見据えた眼と蒼白な顔が、悪い予感をそそった。あてもなく肩をもんだり、背中をさすったりしているうちに、彼女は少し身動きをした。ぼくは母を立ち上らせ、階下に運び、汗をふき、着替えさせ、そして寝かせた。

落ち始めたのは、その翌日からだ。歯を磨きながら肌の点検をしているぼくの耳に、大きな物体が倒れた時のような音がとどいた。見に行くと、母が鉄製の螺旋階段から落ちたらしい恰好で床におおむけになり、天井を睨んでいる。肘をすりむいたほかは、無事らしかった。

ぼくが学校に出かけようとする度に、彼女はつまづいたり倒れたりした。絨緞の逆毛にまでつまづいた時には、思わず苦笑いが出ってしまった。長年家を手伝っている女性が見張っていてくれると言ったが、ぼくはどうしても外出する気になれないのだった。おかげでその日、ぼくは女友達と二人で祝う筈だった誕生日を、すっぱかす破目になってしまった。

生活空間のありとあらゆる状況で、転げ落ちたりつまづいたりすることが、愛の不毛をどのように補償するのかぼくには見当もつかない。しかしそれは現に起こったことで、しかもぼくはその事態にすぐ慣れてしまった。異常な事に対する慣れがあまりにも早い、という事にぼくは驚いた。